

# 初期英語における空主語の認可とパラメーター変化

縄田裕幸

## 1. 局所的空主語言語としての初期英語

義務的に主語を必要とする現代英語と異なり、古英語・期初中英語（以下「初期英語」）では(1)のような空主語構文が観察される。

- (1) Ða he ðus gefaren hæfde pro wende þa norðweard to his scipum  
when he thus gone had [he] turned then northward to his ships  
'When he thus had gone, he then turned northward to his ships.' (ChronC 1013.25 / Rusten (2019: 103))

ただし、初期英語の空主語の分布は現代イタリア語などの「均質的空主語言語」や日本語などの「談話的空主語言語」、フィンランド語などの「部分的空主語言語」のいずれとも異なる特徴をもっていた。Rusten (2019) および Nawata (2014)の調査から、以下のようにまとめることができる。(i)テキストによって空主語の生起率は大きく異なっていた。ここから、古英語の言語共同体には空主語を認める話者とそうでない話者が混在していたのではないかと推測される。(ii)三人称解釈の空主語が一人称・二人称解釈の空主語よりも有意に高頻度で生じていた。(iii)空主語は(1)のように動詞が節の先頭に現れる V1 環境（空主語が先頭要素であると考えれば V2 環境）において有意に高頻度で現れた。

Nawata (2014)によれば、英語の空主語は後期中英語に消失した。本稿では(i)–(iii)の特徴をもつ言語を「局所的な空主語言語」として位置づけその派生メカニズムを示すとともに、なぜ後期中英語で空主語が消失したかを分析する。また、英語史における空主語の認可と消失が、パラメーター理論に基づく言語変化の分析にどのような示唆を与えるかを考察する。

## 2. 初期英語の空主語の認可と消失

まず、名詞類に課せられる制約として以下を仮定する。(a)感覚運動インターフェイス条件：DP が音声的に具現化されるためには、語彙挿入に十分な素性を備えていなければならない。(b)概念・意図インターフェイス条件：指示能力を持たない DP が適切に解釈されるためには、他の要素から指示対象を復元しなければならない。条件(a)より、代名詞は関連する性・数・人称素性が十分に備わっている場合にかぎり音韻部門で語彙挿入が行なわれる。本稿では、代名詞が語根を含まない名詞化子 *n* と *D* の複合体であると想定し、この DP に人称素性が指定されていない場合に空主語が生じると提案する（以下、当該 DP を *DP<sub>def</sub>* と表記）。また、十分な素性を備えていない *DP<sub>def</sub>* はそれ自身で指示能力をもたないので、他の要素から指示対象を復元して条件(b)を満たさなければならない。ここでは Frascarelli (2007)などを援用して、初期英語の *DP<sub>def</sub>* は節左方周辺部の High Topic (*Top<sup>b</sup>*)指定部で節境界を越えた「話題連鎖」を形成し、それによって解釈されたと提案する。

*DP<sub>def</sub>*が主語として生じた場合、動詞屈折に関する一致素性への値付与は次の構造関係のもとで行なわれる。

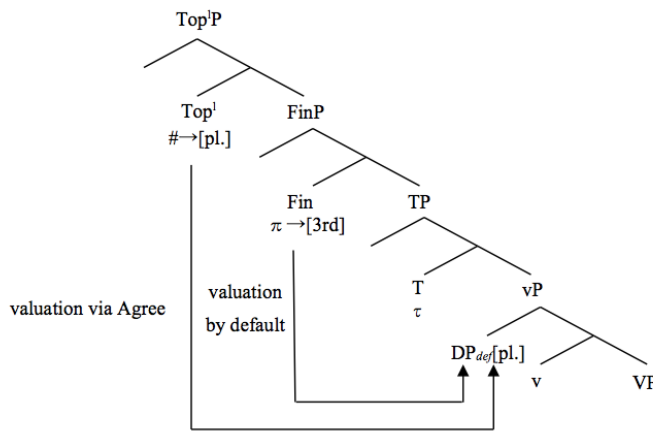


図 1：初期英語での一致素性への値付与

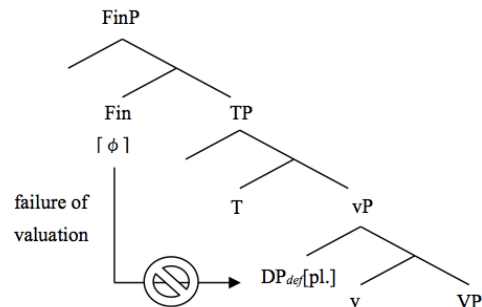


図 2：後期中英語での一致素性への値付与

初期英語では、Low Topic(*Top<sup>l</sup>*)にある値未指定の数素性（以下#）と *Fin*にある値未指定の人称素性（以下 $\pi$ ）が同時に主語 DP と一致関係を結ぶ(縄田 (2019))。主語が *DP<sub>def</sub>* の場合、*Top<sup>l</sup>* の探査子#が *DP<sub>def</sub>* との一致操作

で値を得る一方、Finの探査子 $\pi$ はDPdefとの一致操作が成立しないため、最終手段としてデフォルトで三人称の値が付与される。そしてこの数・人称の値付与に付随して、DPdefがFinP指定部とTopP指定部に移動する。DPdefは形態具現化に必要な人称素性を欠いているため、TopP指定部で音的に空主語として具現化する。しかし同時に、この位置ではC-Iインターフェイス条件を満たさないため、解釈を求めてTopP指定部にさらに移動する。結果として、(1)で示した初期英語の典型的な空主語構文の構造は、(2)のように表される。

(2) [ForceP [ForceP **Pa** [TopP Top<sup>h</sup> [TopIP [vP **he ðus gefaren**] Top [FinP **hæfde** [TP T t<sub>VP</sub>]]]]] Force [TopP <pro><sub>i</sub> [TopIP **pro**<sub>i</sub> [FinP DPdef **wende** [TP **pa norðward to his scipum**]]]]]

この構造において主節TopP指定部にある<pro>は先行文脈で既出の個体と談話レベルの話題連鎖を形成して、それによってDPdefは解釈を得る。

局所的空主語言語の特徴(i)-(iii)は次のように説明される。まず(i)の話者に関する非対称性であるが、初期英語の話者の中に図1のデフォルト一致を許す話者と許さない話者がいたと想定しよう。前者のみが主語としてDPdefを容認し、空主語構文を派生させることができたと考えられる。次に(ii)の人称制限に関して、話題連鎖を通して得られたDPdefの解釈は節内部の移動連鎖でも共有されると仮定しよう。すると、一人称または二人称のDPdefが話題連鎖に含まれる場合、FinP内部でデフォルト三人称を指定されたFin主要部と人称の値が矛盾してしまう。よって、DPdefの解釈もまた三人称に限定される。さらに(iii)の統語環境に関する制限であるが、主節の非V1環境、すなわちTopP指定部に別の談話トピックがある場合、DPdefは同じ位置に移動して話題連鎖から指示対象を復元することができない。また、従属節の動詞末尾語順はvPがTopP指定部に移動することで派生されるが(2)参照)、指定部に移動した要素は島を構成することから、DPdefを取り出すことはできない。これら構造上の制約により、非V1環境でDPdefが生じるとC-Iインターフェイスで認可されない。

後期中英語になると、動詞屈折形態の衰退にともなって#と $\pi$ が別の機能範疇に担われる証拠が失われ、両者はともにFinに生じるようになった(Nawata (2014))。ここで、探査子の値付けに関する制約として「ある探査子 $p$ は、一致操作またはデフォルトによって値を得ることができるが、両者を併用することはできない」と仮定しよう。これにしたがえば、#と $\pi$ が独立した探査子としてはたらく図1の初期英語と異なり、両者が単一の探査子となっている図2の後期中英語では、#が一致操作、 $\pi$ がデフォルトで値を得ることはできない。したがってDPdefが現れると統語派生の破綻が不可避となり、空主語は英語から消失した。

### 3. 理論的含意

以上の分析より、初期英語で空主語が認可される諸要因を整理すると図3のような階層関係が得られる。最初の分岐点は動詞のデフォルト一致を許すかどうかであり、それによって空主語を許さない話者と許す話者が区別される。四角の囲みの中は空主語を許す話者がもつ文法を表している。他方、Roberts (2019)は図4のパラメーター階層を提案している。この階層では空主語を許さない現代英語は有標であり、空主語を許す日本語タイプの言語へと変化すると誤って予想される。英語における空主語の消失を説明するモデルとして事実と合致しているのは、図4ではなく図3である。言い換えると、「通時的妥当性」の観点では本稿の分析に利があることになる。

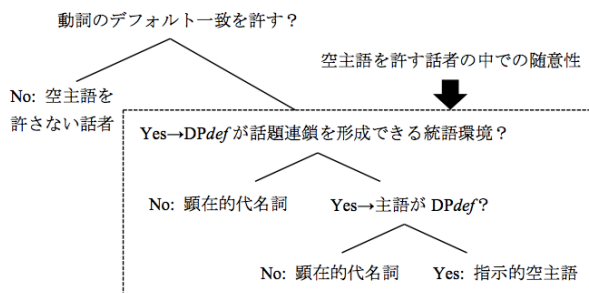


図3：局所的空主語が生じる要因の階層関係

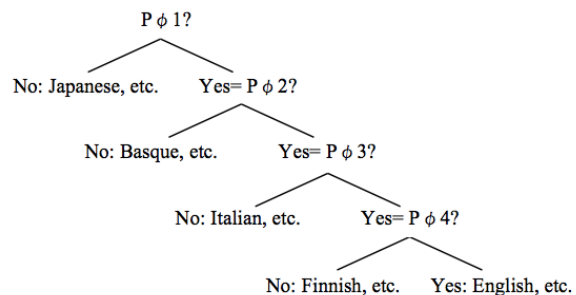


図4：空主語言語のパラメーター階層 (Roberts (2019))

参考文献：Frascarelli, Mara (2007) “Subjects, Topics and the Interpretation of Referential *Pro*: An Interface Approach to the Linking of (Null) Pronouns,” *Natural Language and Linguistic Theory* 25, 691–734. / Nawata, Hiroyuki (2014) “Verbal Inflection, Feature Inheritance, and the Loss of Null Subjects in Middle English,” *Interdisciplinary Information Science* 20, 103–120. / 縄田裕幸 (2019) 「英語の節構造の変化」草稿, 島根大学 (『生成文法と言語変化』所収予定). / Roberts, Ian (2019) *Parameter Hierarchies & Universal Grammar*, Oxford University Press, Oxford. / Rusten, Kristian A. (2019) *Referential Null Subjects in Early English*, Oxford University Press, Oxford.